〈はじめに〉

アーサー・C・クラークというSF作家がいます。「2001年宇宙の旅」という映画の原作者ですが、中学生のころ、この人の書いた「幼年期の終わり」という本に夢中になりました。読み終わり、それまでと、世界がまったく違って見えてきたからです。この小説で、地球と人間は滅亡の危機に瀕しています。けれど、その状況は、人間より、はるかに文明の進んだ異星人に見守られていたことがわかります。時が至り、異星人は地球を救い、そして世界を治めます。しかし異星人には真の目的がありました。それは、今はまだちっぽけだけれども、これから自分たちをはるかに凌ぐ進化を遂げて行くはずの人間の保護者となることでした。たとえ無謀に思えても、常に目標を探し、希望を持ち、前に進んで行こうとする生き物である人間に、異星人たちは強い憧憬を抱きます。◆人間が描いた物語です。ほんとうに異星人が存在するわけではありません。けれど、そのように高い地点から、深く、自分自身を洞察し得る人間という生物に、そしてそれが自分と同じ種であるということに驚きと畏敬の念を覚えました。◆人間は、自然の中のあらゆる生き物や物質を分析し、また自身の身体を分析し、そして、とうとう、自分の外に自分を置き、すなわち自己という意識を確立して、心の内側を見つめるようになりました。人間の心を探る学びは、きっとこれから、もっと進んでいくことでしょう。その先にいるのは、人間と心を通わせることができるロボットかもしれないし、テレパシーを持ったニュータイプの人類なのかも知れません。◆人間は相矛盾する存在です。相手の心をほんの小さな仕草や目の動きから、的確にとらえることができます。そういう点では、もうすでにテレパシストと言えるのかもしれません。その一方で、個人的経験を、それがどんなに単純なことであっても、また相手が誰であっても、まったく同一に伝えることは不可能です。その点では、人間は非常に孤独な生き物です。子どもであれ大人であれ、伝わることより伝わらないことのほうがはるかに多い。その人間の特質を心に刻んで、人と人のあり方や、療育を考えて行きたいと思っています。◆クラークの本を読んでから、30年以上が過ぎました。再び、こうして、その本のことを語れる時が来たことの不思議さに打たれます。また今回、本を再読し、その中のいくつかの言葉やシーンが、自分が物事を考え、何かを作り出そうとするときのイメージの原型になっていたことを発見しました。途切れてしまっているようで、心の糸は、気づかぬうちに意識の奥底で繋がっているのだな、と痛感しました。そして、その事実にも、人という生き物の可能性を感じています。

◆今回お話しする「読解」というテーマに引き寄せて考えるとき、医者の語った、「希望」という言葉は、「問題解決」という言葉に、置き換えることができます。なぜなら、人間は、生まれながらに、自ら問題を設定し、その解決を希求する生きものだからです。私たちが文章を読み進める最大の動機も、その先を知りたい、解りたい、という気持ちである、と言われています。そして、それは、人が生きて行くことの本質とも、重なり合うものです。砂漠の中の男たちは、死と隣り合わせであるはずの過酷な労働の中に、物を作り上げる喜びや達成感を見出して、その命を繋ぎます。◆個人的には、砂漠に行ったことも、アフリカに行ったこともないし、遭難したことも、飛行機を作ったこともありません。きっと、これからも、多分、ないでしょう。けれど、そのように個人の経験とはかけ離れたひとつの物語が、たとえば「勇気」や「創造」の象徴として、心の中に生涯在り続ける、ということは素晴らしいことだと思います。ただ、その素晴らしさを手に入れるためには、一定のプロセスと、技術が必要です。それは、まず、物語や作品というものを、自分の外側に認知することから始まり、その世界に入っていくための通路を、切り開かなければなりません。そして、通路の先に広がるファンタジーの世界を、よりよく生きるためには、小説や映画、マンガ、演劇、舞踏…それぞれに異なる表現の文法を学ばなければなりません。◆いま、ファンタジーの世界を“生きる”と書いたのは、比喩ではありません。読むこと、観ること、は、架空の世界を通して、他者と繋がって行く行為だからです。一生をかけても巡り合えない体験を、作品の中で体験し、それが生きることの糧になるのであれば、そこは、私たちが常日頃、現実と感じている世界よりも、よりリアルな世界である、ということもできます。誰かが紡いだ優れた物語は、時と場所を超え、人間の心を結び、不確かで不安に満ちた日常生活に、確かな手応えを与えます。ああ、やっぱり私は、あの人と同じ世界で暮らしているのだな、と。そのような今を確かにする、物語の体験を、子どもたちが少しでも、持ち得てくれれば、と思います。